



追悼 小川紳介

緊急上映 3月14日(土)→27日(金)

「ニッポン国古屋敷村」

「1000年刻みの日時計——牧野村物語」

「青年の海——四人の通信教育生たち」

「日本解放戦線三里塚」

追悼 小川紳介

偉大な映画作家、小川紳介が逝った。55歳であつた…。常に現実を凝視し、自らの感性と肉体を通してみつけた「ことば」で映画表現を試みた希有な作家であつた。

初期の「庄殺の森」から「三里塚シリーズ」まで、権力と対峙するラディカルな闘争を描きながらも、小川監督の眼差しは闘う一人一人の人間に向けられていた。生活基盤を奪われた農民と時間や場を共有しながら「対象に密着しながら普遍的なものを探る」小川プロダクション独自の的方法論を切り開いていったのである。

やがて山形県上山市にプロダクションごと移住してからまず彼らが目指したのは、稲作り、一人前の農民になることだった。そして勿論、農業をしなからカメラを回し続けた。生き物としての稲、自然気象、その土地の歴史、人々の生活をカメラを自らの肌としてドキュメントし続けたのである。スタッフと十数年に及ぶ共同生活を営みながらの映画作りは、世界の映画史上でも類をみない。

小川紳介の名は、世界にもとどろいている。「三里塚シリーズ」以降、ドキュメンタリー作家として「カイエ・デュ・シネマ」を始めとする映画雑誌の紙面を賑わせ、ベルリン映画祭など、各国映画祭ではすぐれて高い評価を得てきた。世界のドキュメンタリー映画のシーンにとって、小川紳介はかけがえのない存在である。特に近年は、アジアの作家を始めとする世界各国からの客人で、山形の小川プロダクション家は賑わっていた。

今回の追悼特集で上映される「ニッポン国古屋敷村」と「1000年刻みの日時計——牧野村物語」は、いずれも山形県上山市での生活の営みの中から生まれた傑作である。養蚕と炭焼きを生業としてきた古屋敷村は、今では数世帯がひ

そりと暮らす過疎村である。だが何の変哲もないこの村にも「歴史」があり、村人の個人史をひもといていくと、そこから今日の「日本」が浮かび上がってくるのである。「1000年刻みの日時計」は、長年撮りためてあつた稲のフィルムから導かれ、牧野村に伝承される物語を村人たちが演じていく野心作である。映画は、地学的に歴史的に古代から現代までをまるで地球の断面図のように照射してみせる。

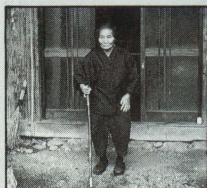
「青年の海」は、岩波映画から独立するきっかけとなった作品で、小川監督のデビュー作。当時岩波映画に所属していた小川紳介は法政大学のPR映画の撮影スタッフとなる。大学側から通信教育をその対象から外すように指示された彼は、自力で通信教育生を撮ることを決意する。撮る側も、撮られる側も皆若く、青春の記念碑的作品として小川監督が愛していた。

「日本解放戦線三里塚」は、一連の三里塚シリーズの中で監督がもっとも強く思い入れていた作品。死の間際まで、この作品を再編集して再び蘇らせたいと語っていた。

なお、ユーロスペースでの追悼上映はこの4作品だが、全作品の回顧上映がアネフランセ文化センターで5月下旬に催される予定です。

小川監督は、映画をこよなく愛していた。自らの体験から掴んだ方法論による新しい映画表現の創出に全身全霊を傾けてきた。私たちは、小川監督が次はどんなことをしてくれるかと期待し続けてきた。「1000年刻みの日時計」の次回作は、「日本解放戦線三里塚」を編集し直した「大アクション映画」のはずであった。小川監督は今頃あの世で、大好きなロバート・フランクの横に座り、例によって熱っぽく機関銃のように語りかけているかもしれない。小川監督の、映画と生き物すべてに抱き続けた情熱の炎を引き継いでいくことを誓って冥福を祈ろう。合掌。

『ニッポン国古屋敷村』



1982年 カラー 3時間30分
ベルリン映画祭国際映画批評家賞
製作＝伏屋博雄 撮影＝田村正毅
音楽＝関一郎 助監督＝飯塚俊男

蔵王山を仰ぐ古屋敷村。かつて18軒あった家々は現在わずか8軒。炭焼きはただ一人。若い者は町で働き、日中は年寄だけの村。映画の前半部分では昭和55年夏の大雪による凶作を、科学的に解明することで古屋敷の地形や気象を明らかにする。古屋敷の暮らしはこの上に営まれてきた。古屋敷の人々の語りを通じて、映画の後半部分で描こうとしたのは、古屋敷の暮らし、その中で育まれて来た人々の心と言葉である。

『青年の海——四人の通信教育生たち』



1966年 白黒 56分
製作＝「大学通信教育生の記録映画」を作る会
撮影＝奥村裕治 助監督＝神公平

「通信教育——働きながら学ぶことは素晴らしい」という神話は果たしてそうなのか。通信教育制度改革（4年に5年に延長）反対の戦いはこの問題と真向からぶつかった。四人の通信教育生とカメラは一つの熱気をもって結束し、いつしか多くの共感を胎み、ひとつの「映画」を生み出した。新しい生の息吹き、それを愛と呼ぼうか連帯と呼ぼうか。ひとつの胎動がここにはある。

『1000年刻みの日時計——牧野村物語』



1987年 カラー 3時間42分
製作＝伏屋博雄 撮影＝田村正毅
音楽＝富樫雅彦 助監督＝飯塚俊男
出演＝土方巽／宮下順子／田村高廣
／河原崎長一郎／石橋蓮司／島田正吾

昭和50年、小川プロのスタッフは山形県上山市牧野村に移住した。稲を撮るために稲を作ることから始めたスタッフは、田を耕し、土を調べ、水を探り、日照と山の冷気を記録する。ここでは詩と科学が同居し、村はやがて劇場と化す。小川プロが移住して13年後、映画の中で牧野村の人々は240年の村の歴史を再現する村人そのものとして登場する。村の伝承譚を演じる土方巽、宮下順子、農民一揆を演じる田村高廣、河原崎長一郎と村の農民。記録映画と劇映画の奇跡的な融合である。

『日本解放戦線三里塚』



1970年 カラー 2時間21分
製作＝小川プロ 撮影＝田村正毅
音楽＝真鍋理一郎
助監督＝福田克彦／本間周輔

空港敷地内に整地作業のブルドーザーが姿を現わし始めた。公団による、親戚や知人を通じての内部からの懐柔や切り崩しは激烈をきわめていく。そんな日々、部落では連日寄り合いが持たれた。「俺も初めは兄弟四人で反対してきたわけ。しかし今はよ、俺一人になっちゃってよ。それでも俺は兄弟のつながりよりも部落の人間関係の方を重くするよ」。真赤な夕陽の空を背景に、天浪団結小屋の旗が数本ひるがえっている。

3月14日(土)→20日(金)

3月21日(土)→27日(金)

ニッポン国古屋敷村	1:30	—	7:00
青年の海	—	5:30	—

1000年刻みの日時計	12:00	—	7:00
日本解放戦線三里塚	—	4:15	—

●入場料＝一般1500円／シニア1000円(前売券なし)

※『青年の海』のみ1000円均一

●各回入替制

ユーロスペース TEL.3461-0211

渋谷駅東急プラザロ下車2分 東急観光うしろ